

週刊

GAINAX総監修ビジュアル・ガイドブック

新訂版

EVANGELION

C H R O N I C L E

エヴァンゲリオン・クロニクル

09

定価 **690**円(税込)

2010/4/6

Mechanic Sheet

エヴァンゲリオン
量産機

NERV車両

Character Sheet

キール・ローレンツ

Tactics Sheet

第9使徒マトリエル戦

Timeline Sheet

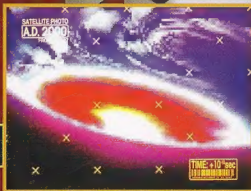
人の造りしもの

Technology Sheet

セカンドインパクト **A**

Extra Sheet

用語辞典 / 企画書 / トピックス



**特製バインダー
発売中!**

DEAGOSTINI

名称登録 deagostini.jp

汎用型決戦兵器

人造人間 エヴァンゲリオン



兵器 産機



人類補完計画を担う

ゼーレ直轄のEVA



ゼーレ

EVA SERIES 05-13

MASS PRODUCTION MODEL

Illustration by Hirofumi Ichikawa

Mechanic Sheet

EVANGELION MASS PRODUCTION MODEL
EVA-05-13 直轄機
VANGELION MASS PRODUCTION MODEL

Sheet
05

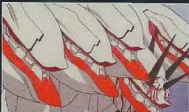
EVANGELION MASS PRODUCTION MODEL

S⁺機関を搭載した EVAの量産モデル

「人類補完計画」のために建造されたゼーレ直轄のEVA。それがEVAシリーズと呼称される5~13号機までの量産機である。これら9体はS⁺機関を標準搭載し、ロンギヌスの槍のレプリカを持つ。しかしながら、その能力と装備は使徒殲滅のために用意された方ではない。すべて人類補完計画遂行に必要なものであり、9という機体数も、EVA初号機を依代に据えて具現させた“セフィロートの樹”にある10のセフィラー（カバラにおける神のエネルギー流出段階）に対応するためのものであろう。

能力と装備において従来のEVAと一線を画す量産機は、対EVA戦力としての側面も持つ。実際にその力はEVA弐号機に振るわれ、これを制している。その際に見せた捕食行動は、“ヒト”が操縦しないEVA本来の姿なのであろうか。

量産機は、叛意を示したゲンドウ＝NERV本部の制圧のため、ゼーレによって投入された。そこで抵抗する弐号機を蹂躞し、初号機を依代としてサードインパクトを誘発させる。その過程でリスと同化、最後は活動を停止したかのように石像と化する。



弐号機によって一度は活動停止に追い込まれる量産機だが、S⁺機関の力の一瞬と思われる驚異的な再生能力を見せて活動を再開する。



サードインパクトを引き起こした量産機。その後、初号機によってロンギヌスの槍のレプリカが破壊され、石像と化して地上へ降下していく。

DATA

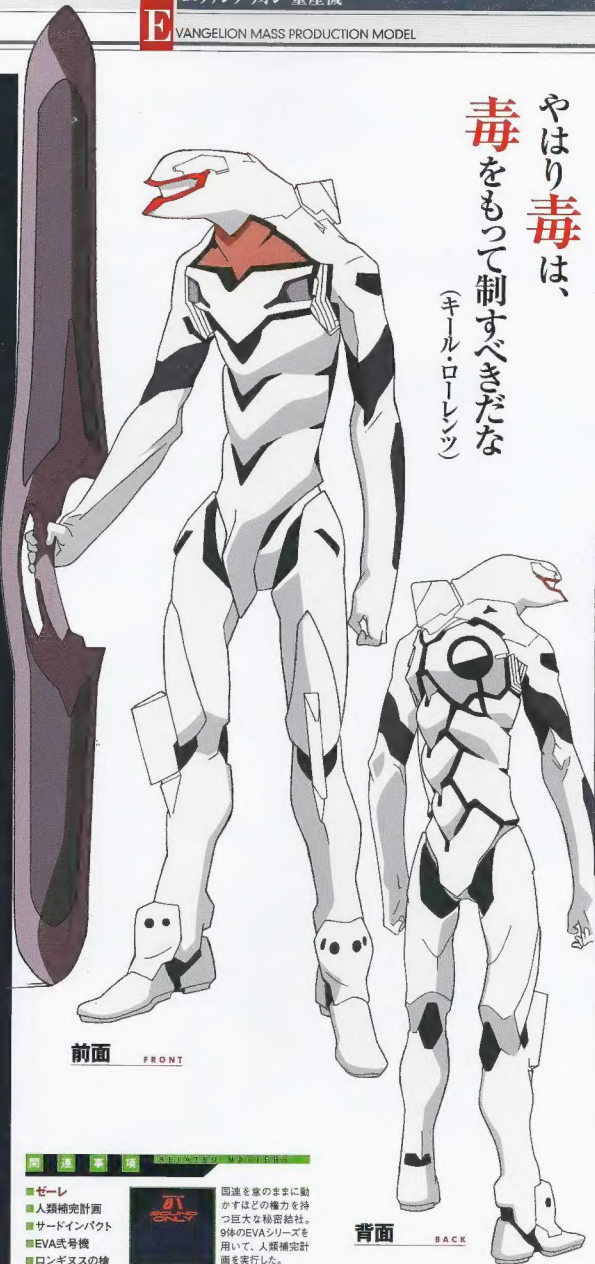
機体:EVA SERIES 05-13
MASS PRODUCTION MODEL

量産機

搭乗者:DUMMY PLUG
KAWORU.01

主武装:WEAPON
ロンギヌスの槍(レプリカ)

機体配色:COLOR



前面 FRONT

背面 BACK

やはり毒は、
毒をもって制すべきだな
(キール・ローレンツ)

関連事項 RELATED MATTER

- ゼーレ
- 人類補完計画
- サードインパクト
- EVA弐号機
- ロンギヌスの槍



図説をそのままに動かすほどの権力を持つ巨大な秘密結社。9体のEVAシリーズを用いて、人類補完計画を実行した。

量産機の構造

頭部以外はプロダクションモデルと同様のボディを持つ量産機。S²機関を動力にすることで実現したと思われる再生および飛行能力を持ち、機体性能は従来のEVAを大きく上回る。また、遠格者ではなく、標準搭載のダミープラグによって稼働する点も特徴。

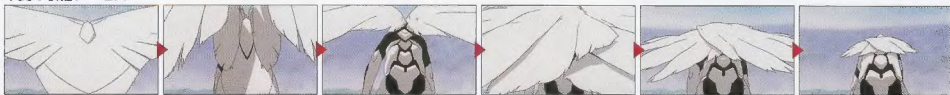
1 伸縮自在の翼

格納式の翼を背部に持ち、単体の飛行が可能。これによって運用の幅が広がり、「空中からの攻撃」という3次元戦闘を可能にしたものの、量産機がその機体性を活かして戦うことはなかった。むしろ翼はサードインパクトに必要であった模様。



量産機同士のA.T.フィールドが失墜を防止する際、翼の内側に複数の目のようなものが出現。その後リリスレイとの同化現象が見られた。

↓翼の収縮プロセス



2 八虫類のような頭部

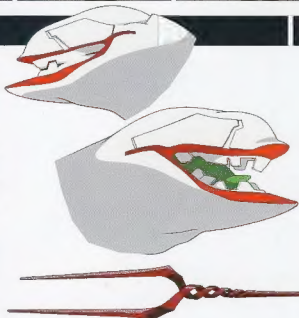
八虫類の頭部は生物的嫌悪を感じさせる。笑むように口先を歪めるしぐさは、知性ある生物のような意志を感じさせるも、それが感情に基づくものかどうかは定かではない。



試号機の生体部品を壊し散らかす量産機。口は拘束具で閉じられており、初号機に生じた羽のような部分を腐んで空中へと牽引した。

4 大剣(ロンギヌスの槍のレプリカ)

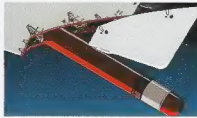
携えた大剣はロンギヌスの槍のレプリカである。あくまでイメージコピーと思われるが、A.T.フィールドを貫く力かオリジナルと遜色ないものようであり、サードインパクトの発生において、初号機の掌に聖痕を刻む役割を果たした。



↑ロンギヌスの槍

3 ダミープラグによる稼働

ダミープラグは人間の遠格者に劣るといえる。専ら、戦闘ではセカンドドレンの試号機に選れられており、結局のところ再生能力と武器性能の力押しで打ち勝てただけである。家蔵での判断能力ももことながら思考能力も低く、数々の有利な点を活かして試号機に戦闘を仕掛け、各個撃破されている。



ダミープラグの表面に「KAWORU」とあるため、フィクスドドレン・蒲刈のパーソナルデータを用いていると思われる。

↑ロンギヌスの槍のオリジナル。A.T.フィールドに対して絶対的な突破能力を誇るほか、生命の起源に対する活動停止能力、生命の樹への還元能力など、単なる武器の枠に収まらない秘めたオーパーツである。

量産機の活動記録

NERV本部の制圧に投入されたEVAシリーズ、試号機の抵抗に遭い次々と活動停止に追い込まれるが、S²機関によると思われる再生能力によって活動を再開し、ロンギヌスの槍のレプリカを用いて試号機を打破。電源の切れた同機を容赦なく蹂躞させた。その後、初号機を依代としてサードインパクトを誘発させた。その際にリリスと同化し、自らのコアにロンギヌスの槍のレプリカを突き立てる。それを契機に、人類は一斉にL.C.L.と化していく。最後は、初号機の振るうロンギヌスの槍から放たれた光にうたれ、ロンギヌスの槍のレプリカは消滅。石像と化した量産機は地上へ降下していくのだった。



初号機を中心として降かれたセフィロットの樹。初号機のほか量産機それぞれが各セフィロターの役割を担うことで具現した。



圧倒的な力で戦い続ける試号機も、電源切れによって力尽きる。その試号機を暴言で罵り、罵りものにす量産機。



初号機の振るうロンギヌスの槍の光を浴びたロンギヌスの槍のレプリカは、歪曲空間によって増殖し、狭く間に消滅した。

特記事項

量産機とS²機関

「後述の持つ生命の樹」であろうS²機関。これの復元、開発過程において、NERVのアミカ第2支部がこの世から消滅しているほどの力を秘めている。それを搭載された量産機は、理論上無限の稼働時間と膨大な再生能力、および飛行能力を手に入れた。しかし、セーラが真に求めたのは、サードインパクトを起こすために必要な、アンチA.T.フィールド発生能力であらう。



量産機も「S²機関稼働型」と呼んだ名をカウソウ。これらEVAシリーズが何を目指して建造されたのか、予め知っていた様子だ。

C

キャラクターシート

Character Sheet

キール・ローレンツ

Sheet

15

K
IEL LORENZ

人類補完計画を
推し進める



キール・ローレンツ

KIEL LORENZ

ゼーレの
最有力者

個人情報

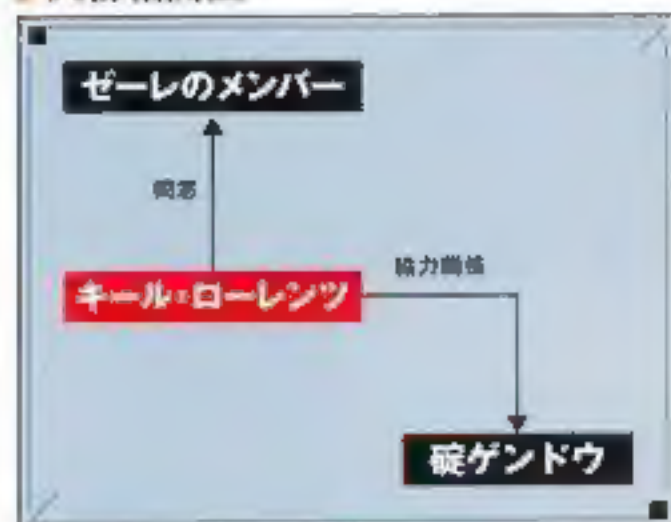
名前	キール・ローレンツ
年齢	不詳
国籍	ドイツ
生年月日	不詳
血液型	不明
所属	ゼーレ / 人類補完委員長

「真死海文書」の記述に従い、特務機関NERVが推し進めてきた、「E計画」「アダム計画」を含む3つの計画のうち最重要とされる計画——人類補完計画。そのスケジュール進捗を指導、監査する国際の秘密組織「人類補完委員会」の議長を務めるのがキール・ローレンツである。また、人類補完委員会の上位機関にあたる国際的組織ゼーレの主要メンバーのひとりでもある。

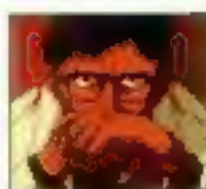
キール自身のことについては、その名と、ドイツ国籍を持つということ、その身体のほとんどが機械化されているということ以外は明らかになっていない。年齢、家族構成、もしくはその過去についての情報は一切存在しない。これは秘密結社の一員として、意図的に隠されている情報なのかもしれないが、定かではない。ただ、少なくともセカンドインパクト前後からゼーレに在籍していたらしきことは判明している。常にバイザーを装着していること、過去にもサングラスをかけていたことなどから、視力に問題を抱えているのではないかと考えられるが、それもまた確信できるものではない。

また、その性格についてもあまり確かなことは分かっていない。眼が隠されているせいもあり、その感情を表情から読み取ることが困難なことに加え、あまり口数も多くはないためである。会議の際、ゲンドウに命令を下す時においても、大抵の場合において要点のみを語っていた。これらは、自分たちの計画を推進するのに余分なものはすべて排除する、という姿勢の表れとも考えられる。

人物関連図



- 碓ゲンドウ
- ゼーレ
- 人類補完委員会



ゼーレに近づき、その中絶へと近づいた如くない。キールとはセカンドインパクト以降からの知り合いである。

表情 / 服装



側面

→ 顔にはあまり太いベルトが巻かれていて、コートの一部と考えるのが普通なのだろうが、キールの場合においては、身体の機械部分を固定するパーツの一部とも考えられよう。



背面

→ 全身が完全に隠されているため、どのような体型をしているのかは不明。ただ、身体機能を維持するための機械が認められていることを考えると、かなりの容姿が必要であると思われる。

正面

→ 顔の両手のコートを完全に隠しているキール。顔と手以外は全く露出してはいない。これは、機械で構成された身体を、外界の刺激から守るためであるとも考えられる。



上半身

→ バイザーにより顔と目は完全に隠れている。耳部に開けられた穴は、音声を送るために開いているものであると推測される。



セカンドインパクト当時のキール



→ 一般的なスーツに身を包んだ過去のキール。現在のキールとは異なるバイザーではなくサングラスで目を隠している。マフィアのボスのような雰囲気を選ばせており、当時より謀略に身をまわっていたとも推測されよう。

キール・ローレンツ という存在



キールがその顔を守るために装着しているバイザーのデザインは、イヌイットが用いる遮光器に由来したものである。

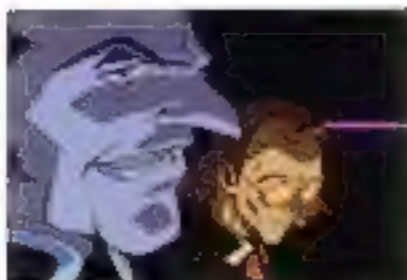
キールという存在について、明らかになっていることは少ない。それは、彼が自らについて何かを語る事が最期の瞬間までなかったためである。何故その身体ほとんどが機械で構成されているのか、その理由すら不明である。キールの機械の身体は、セカンドインパクトの際にその肉体を失ったためのものとも考えられるが、それは想像の域を出ない。キールの所属するゼーレが人類補完計画に乗り出したのは、セカンドインパクト以後である。キールがセカンドインパクト以前よりゼーレに在籍し、おそらくその頃から重要なポストに位置していたであろうことなども考え合わせると、身体を機械に変えてまでも生き延びた理由は、「人類の補完」のためであったといえよう。ただし、セカンドインパクトの地獄の中に何かを見出して人類の補完を望んだのか、それとも以前よりの目的であったのか、真相は闇の中である。ただ、事実はどうあれ、彼の存在が人類補完計画の実行、推進において重要な役割を果たしたことは確かであろう。



人類補完計画として仕立てられた後のキール。残された機械部分は旧来のキールが着用していたものと同等に想像して描きこまれている。



人類補完委員会議長およびゼーレとしてキールが発言をする際には、厳格な態度が窺っている。計画推進において、自他共に對する厳しさが求められていたためであろう。



委員会の議員たちがそれぞれどのような性格を持つ人物であるかは不明だが、概して鋭い眼光を持ち、一筋縄ではいかなさうな輩たちばかりである。



他の議員がそれぞれ発言をした後、それらを取りまとめ、NERV総司令部セントラルに再発を促すのは議長たるキールの役割である。

独・英・米・露・仏の5カ国よりひとりずつ集められた委員からなる国連の秘密組織、人類補完委員会。各国の代表として集められた議員は癖の強そうな人物ばかり。おそらく委員には各国のトップたる存在が選出されていると考えられ、そういった位置にいる人物ならば、それは仕方のないこととも言える。しかし彼らが、キールが議長であることに不平を言う様子や、キールの決定に逆らう様子などが見受けられる場面は存在しない。これは、キールが長たる人物として認められているという証左であり、彼は議長にふさわしい実績、人格、能力を持ち合わせていたためではないかと考えられる。

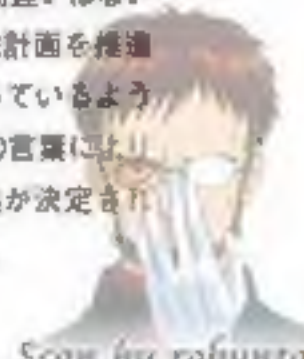
人類補完委員会議長 としての存在

ゼーレ における地位



ゼーレの最高幹部が用いるモニリス。このモニリスを通じて自語する最高幹部が、いったい何人存在するのかが明らかではない。

秘密結社たるゼーレにおける最高幹部の会議は、全員がモニリスのホログラムを通じ、姿を現さず音声のみで行われる。その中で、キールの存在を表すモニリスの番号はNo.01となっている。モニリスに記された番号がどの程度の意味を持つのかは不明であるが、キールはゼーレにおいて、首席、もしくはそれに準ずる存在であったと考えて間違いないだろう。彼の発言はゼーレが人類補完計画を推進する過程において、強い決定権を持っているようである。ゲンドウとの対立後、キールの言葉によりNERV本部の武力行使による直接占拠が決定されたことなどからも、それは見て取れる。



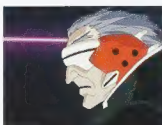
若き日の

暗躍



公式発表を行なう国連の人物に押し寄せる大勢の取材陣。その中にキールが紛れおり、近くにはゲンドウの姿も確認できる。

2000年9月13日に南極大陸にて発生した、有史以来最大の爆発、セカンドインパクト。これは、南極で発見された光の巨人アダムを、ほかの使徒が覚醒する前に卵に還元しようとしたことが原因で引き起こされたものであったという。しかし、国連の公式発表では、大質量隕石が光速の数%の速度で落下したことによるものとなった。これは明らかに情報操作がなされたものであり、その裏にはゼーレ、ひいてはキールの存在が見え隠れしていた。当時の新聞記事の写真などに彼の姿が見られることから、情報操作の裏にいた人物は、若き日のキールだったのではないかと推測される。



EVA初号機が使徒の5号機を取り込んだことは、ゼーレのシナリオと大きく異なったことであった。それにより、キールはゲンドウの不信をより露わにしていく。

ゼーレとゲンドウ、その対立が明確になった瞬間。これより後、ゼーレによるMAGIのハックが止行なわれ、それを阻止されたことによりNERVの直接占拠が始まる。



国連の直属機関である特務機関NERVの総司令を務める人物、碇ゲンドウ。彼はゼーレと同様、人類を新たな段階に人工進化させる、人類補完計画を目指していた。そのため両者は協力関係にあり、キールはゼーレの主要人物として、ゲンドウに計画を推進させるための直接的な指示を与えていた。しかし、ゲンドウが想定していた人類補完計画がゼーレのそれとは異なるものであったために、ゼーレのゲンドウに対する不信感は募り続け、彼らの確執は修復不可能なものとなった。そして、最終的には武力衝突へと発展、ゼーレはNERV本部の直接占拠を図ることとなる。

碇ゲンドウとの関係

人類補完計画への執念



ロンギヌスの槍、EVAシリーズ、そしてEVA初号機の要素が揃い、人類を補完する儀式が始まった瞬間のキール。自らが心より望み、それに向かってひた進んでいた補完が始まった瞬間であるというのに、その表情には変化は見られない。完遂するまでは、油断は許されないということなのかもしれない。

身体ほとんどが機械で構成されていたキール。おそらく既に生身の肉体では生命を維持することが出来ない状態であった中、機械化により生き長らえ、補完の瞬間を待っていたと予想されるが、定かではない。しかし、もしそうだったとするならば、彼の人類補完計画に対する執念は並々ならぬものであっただろう。キールが何を思い人類の補完を求めたのか、それは不明である。しかし、実際のところ、彼はゼーレという組織において、ただ人類の補完に向けてのみ邁進していたように思われる。その傍証として、計画について以外の事柄に言及する場面は、ほとんど見受けられなかった。



天から注ぐ赤い光に照られ、それまでに見たこともない笑みを浮かべたまま補完されていたキール。手を握っている姿は、何かに誓っているようにも見える。その最期の言葉はほどこが苦悶的でもあり、後が何を思っていたのかは知る由もない。その思いは彼の身体がL.C.L.と化すと同時に溶けていってしまった。

「始まりと終わりは同じところにある。よい、すべてはこれでよい」——これが、補完の瞬間にキールが残した最期の言葉であった。自らが推し進めていたのは違う方法でなされた補完は、彼にとって望んだものだったのか、あるいは望みとは異なっていたが結果としてはよいという諦めなのか、その真意は明らかではない。

笑みを浮かべるキールの姿が見られるのはただ一度、この最期の瞬間だけである。彼が何を見たか、それは判らない。しかし、彼はその満足げな笑顔のまま、L.C.L.と化していった。ただ、その身体の大部分を占める機械部分は残されたままであった。

最期の瞬間に見たもの

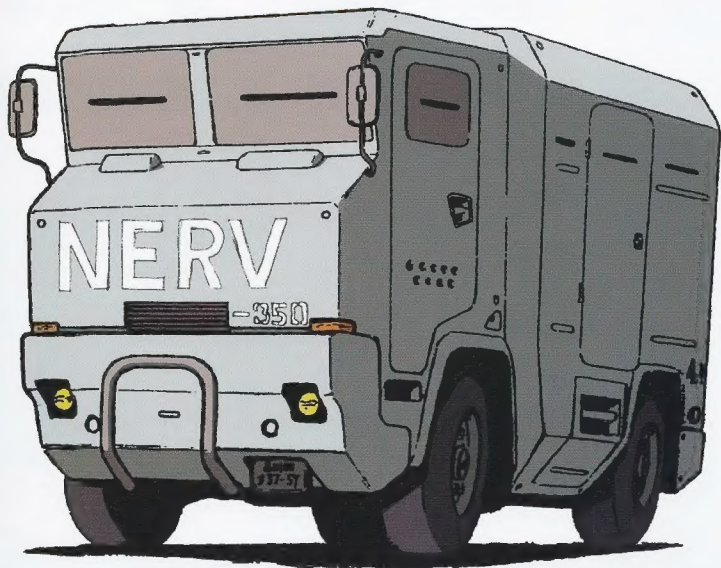


N

ERV車両

NERVの配備車両

対使徒戦略を支える



現代社会において車は欠かせない移動手段である。さらに多種多様な機能を兼ね合わせた特殊車両はそのネットワークと相まって高い利便性を持つ。

NERVでは、第3新東京市内での使徒迎撃戦のほか野外戦にも備えるべく、対使徒戦においてEVAをバックアップするための特殊車両を揃えている。その最たるものが、対使徒戦略に欠かせない情報処理能力を有する指揮車両であり、軍用用の大型車から治安担当の警備車まで、「情報」の重要性を理解した上での実戦運用を行なっている。

戦闘に真備を発揮する車両のほか、要人送迎、建築作業用といった日常的な車両も多い。特にNERV本部の工事や戦闘での破損を補修するためにも、作業用車両は昼夜問わず稼働が続く。

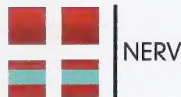
これら車両は戦闘の矢面に立つことこそ少ないものの、NERVを支える「線の下力持ち」として大事な役割を果たしているといえよう。



EVAの輸送に特化した特殊装甲を有する作業用車両として、対使徒戦に活用される。



NERV本部の工事や戦闘での破損を補修するための作業用車両として、対使徒戦に活用される。



NERV

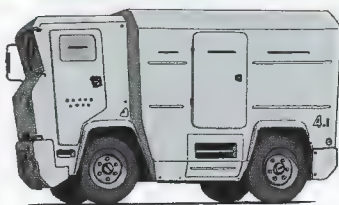
NERV Vehicles

警備車

警備部が使用するワンボックスタイプの車両。指揮車としての機能を備え、戦略自衛隊もNERV本部襲撃の際に野戦司令部として用いていた。



第一、運用が容易なため、必要に応じて射撃訓練や警備任務の派遣に使用される。また、警備部が使用するワンボックスタイプの車両は、戦略自衛隊もNERV本部襲撃の際に野戦司令部として用いていた。



↑側面



↑背面

トレーラー

小型のトレーラー。内部は簡易休憩所などに使用されている様子。なお、牽引車両やトレーラーは用途に合わせて複数種類あると思われる。



ヤマト作戦決行前に、アジアンと解放レイヴンがラゲージへ乗換える際、使用した。開閉式の長椅子とロッカーが向かい合わせに2組ずつ備わっており、電動式タペストリーによって車内を中央で仕切ることが可能となっている。



↑トレーラー車内

←電動式タペストリー
↓開閉式椅子



公用車

国連およびNERVでは、高級車であるキャディラック・コンコースを公用車として使用。要人の送迎などに使われていると考えられる。そのほか、保安課幹部の足として活躍しているようだ。



シンガポール新東京市を去る決意をした際に合計2度ほどは乗車している。ワードルデンである彼の警護乗務員という存在を新ひな保安課幹部のメンバーによって、警備根拠地まで送られた。

ゼネラルモータース社の名車で、政府指導者などの専用車として広く採用されている。車体には公用車であることを示す「NERV」[UN]の文字があり、ナンバープレートも独自のものとなっている。



特記事項

車両以外のNERVの装備

NERVの活動を支える装備は、車両以外にも航空機や艦艇など多岐に及び、様々な装備が用途別に活用されている。基本的に国連と共通の装備を有す。なお、14式大型戦闘自走車のように本来の用途とは別の使われ方をする場合もあるが、これは柔軟な運用が図られている証拠といえる。



LCLプラントにも、作業用と思われるフリグートの機体が写っている。



車両以外にも使われ方がある。偵察や輸送などに用いられる。

●作業機械

高度な科学技術が必要とする作業機械が活用化されているのもNERVの特徴のひとつである。レーザーを搭載した水中作業機械など、無人作業または遠隔操作可能な機械が普遍に使われていることから、技術水準の高さが窺える。

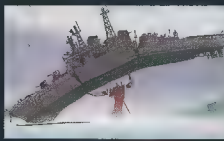
→水中での潜水作業のため、開発されたと思われる無人作業機械ボットーム。



→無人潜水機(ROV)のNERV本部に投入された際にレーザーで攻撃するが、A.T.フィールドで防壁されてしまう。

●艦艇

日本近海の周辺には、海軍艦艇は多岐な、国連軍(UN)はNERV所有)の艦艇も在りて居る模様。なお、LCLプラント、地底洞にはフリグートが停泊している。



→シブアノボの地底洞に配備されたフリグート。艦艇も在りて居る模様。なお、LCLプラント、地底洞にはフリグートが停泊している。

●航空機

VTOL機能を有した新世代の戦闘機(NERV仕様)を所有しているほか、米海兵隊が誇る多用途に使用可能な輸送ヘリであるスーパースタリオン(ホ)などが配備されている。これは主に要人の輸送や偵察などに用いられ、最新鋭で使われるとはあるものの、戦闘に参加することはない。



関連車両

- NERV
- ヤマト作戦
- 保安課幹部
- 作業車
- 国連軍



→特殊用途を目的とする国連軍の特殊機関。そのため、世界で最も充実した機関車級の設備を持つ機関車といえる。



南極大陸に隕石が衝突する様子は、さまざまな研究機関の天文学者や宇宙ファンが注目して観望の観望を繰り返している。また衛星からの熱画像も使われているが、その撮影も車庫の真相を明らかにするために不十分であると取らざるを得ない。

セカンドインパクト

SECOND IMPACT

主に20世紀に行なわれた綿密な地質学上の調査によって、地球上で進化を遂げた生物は複数回に渡って未曾有の大災害に見舞われたことが判明している。いわゆる「大量絶滅」である。原因としては大規模な地殻変動、地軸の傾斜角の突発的な変化、極端の転回、さらに日照量の劇的な変化などが挙げられているが、正確な原因は判断していない。だが原因が何であれ、災厄に見舞われた時代に生きた生物の大半が死滅したことは紛れもない事実である。そしてそれは人類にとっても例外ではなかった。時に西暦2000年。突如飛来した隕石が南極大陸に衝突し、全世界規模の大災害を引き起こしたのだ。これが世に言う「セカンドインパクト」である。

最も古い大量絶滅は約2億4800万年前（古生代ペルム紀）に起こるとされる。当時の地球は温暖な環境に恵まれ、陸上には様々なシダ植物が生い茂り、恐竜の直系の祖先に当たる双弓類が生息していた。さらに当時は赤道付近に巨大大陸パンゲアが形

成されており、大陸周辺の浅い海には軟体動物、棘皮動物、腕足動物といった多種多様な種が繁栄していたのである。だがこれらの生物の大半は大量絶滅によって死滅してしまっ。特に海洋生物は95%が失われ、これはすべての大量絶滅のなかでも最大規模であると言われている。一方、中生代白亜紀にも大量絶滅は発生した。この時に犠牲となったのは巨大な爬虫類——恐竜である。青米はユカタン半島周辺に落下した隕石によって地球の気象状況が一変し、それに対応できなかった恐竜はごく短時間の間に姿を消してしまった（恐竜絶滅の説としてはほかにも提出されているが、隕石落下説は最もポピュラーかつ理解しやすい説といえよう）。このような大量絶滅は地球の歴史のなかで何度も発生し、なかには8回もの絶滅が起こったと唱える学派もあるほどである。つまり突発的に地球生物を襲ったに見える未曾有の大災害は、実は決して珍しい現象とはいえないものなのだ。

だが、多数の生命を滅滅に導いた大量絶滅は、まったく異なる側面ももっている。絶滅から生き残った生物はその後、爆発的な進化を遂げているとい

うことだ。ペルム紀に起こった海洋生物の大絶滅を生き残った一連りの生物からは多種多様な魚類が誕生し、地球の海を支配することになった。また絶滅した恐竜に取って代わった哺乳類はやがて霊長類へと進化し、ヒトへと連なる進化の過程を形作ったのである。何となく約40億年前に発生したとされる巨大隕石の落下（ファーストインパクト）を生命の種子が誕生した直接的要因と見る向きもあるほどだ。つまり既存の歴史を経解く限り、大量絶滅の後には次の世代の発展が待っているのである。ならばセカンドインパクトを乗り越えた人類にも、さらなる発展が約束されているのだろうか。それとも人類に取って代わる新たな生物が現われるのだろうか。それはのちの歴史が証明してくれることであろう。

RELATED MATTERS

第1使徒アダム
第2使徒カヲル
第3使徒ササキ
第4使徒ササキ
第5使徒ササキ
第6使徒ササキ
第7使徒ササキ
第8使徒ササキ
第9使徒ササキ
第10使徒ササキ



セカンドインパクト発生当時、NERVで地球規模の調査を行っていた調査員。幼少時代のこの姿の姿に似ていた。

南極大陸と隕石落下地点

発生と経緯

2002年に派遣された第一、第二次調査団の分析記録を基に「セカンドインパクト調査委員会」が発表したところによれば、セカンドインパクトは南極大陸のマーカム山周辺に落下した隕石によって引き起こされた。最大直径10cm以下、質量4.02×10¹⁰トンの隕石が光速の数十%という速度で落下したのだ。ちなみにこのような現象は数億年に一度の規模であり、予測は不可能とされた。



隕石の光がすべて消滅してしまっただけから全世界に海水面が数十m上昇。そのため海抜の低い地域は軒並み海の中に没することになってしまった。



隕石衝突の衝撃は地球の地軸に急激な変動を生じ、地軸の傾斜角が変動したことにより日本では四季がなくなり、一年を通してほぼ夏という状態になってしまった。

●各観測基地

- エドワルド・フレイ基地(チリ)
- 世宗基地(韓国)
- マランビゴ基地(アルゼンチン)
- バマー基地(アメリカ)
- ロセラ基地(イギリス)
- ハレー基地(イギリス)
- マイマイ基地(ドイツ)
- サネエチキ基地(南アフリカ)
- スエパ基地(スウェーデン)
- ノボラツカ基地(ロシア)
- マイト/基地(ドイツ)
- あすか観測地点(日本)
- 昭和基地(日本)
- マラジョーニャ基地(ロシア)
- みずほ基地(日本)
- ドームふじ(日本)
- モーン基地(オーストラリア)
- 中山基地(中国)
- デビス基地(オーストラリア)
- アンゼン・ゼンコット基地(アメリカ)
- ゴストク基地(ロシア)
- ミルヌイ基地(ロシア)
- ケーシー基地(オーストラリア)
- マクマド基地(アメリカ)
- デュモン・デュビル基地(フランス)

この図はセカンドインパクト以前の南極大陸と、各国の観測基地の位置を示したものである。だが各施設と観測記録は欠落しており、正確な隕石落下地点は現在に至るまで不明である。



ヒト自らの手による世界への影響

世界への影響

セカンドインパクトが引き起こした全世界規模の気象異常は多数の人命を失わせた。だが、本当の悲劇はセカンドインパクト後にばかりな。ヒト自身によって引き起こされたのである。9月15日、以前から緊張状態にあったインド、パキスタン国境付近で難民同士が武力衝突が発生。これを契機に政情不安が急速に世界中に広がり、民族紛争やテロ行為を加速させることとなった。9月20日にはテロリストが投下した新型爆弾により東京が壊滅。一連の災害、紛争によって死亡した人数は、当時の世界人口の半数にも上ると言われる。



セカンドインパクトとそれに伴う災厄で命を落とした人々の墓標が広がる記念碑的な場所も作られた。だがほとんどの遺体は失われているため、墓に置けるのは思いのこもったものである。



●関連主導による世界再編

急速に悪化する世界情勢に各国は軍艦の沈黙化に努めながら、セカンドインパクトの被害も進む兆候では国内の安定化を図るのも難しいという状況だった。そこで2001年2月14日、国連が主体となり、各国間で休戦臨時条約(「ヴェンタナ休戦臨時条約」)が締結された。これにより世界は一応の安定を迎えたのである。さらに翌2002年、米、英、独、露、日によって国連が再編されると同時にその発言力が強化され、世界は国連主導の下に再建されることになった。各国が保有する軍艦は国連軍(OJN)に吸収され、有史以来はじめて、人類は統一国家に等しい政治形態を手に入れたのである。その後、国連本部はニューヨークから日本の松本へと移管され、世界はセカンドインパクトの爪痕から回復していったのだ。



対峙後続用として結成された特別部隊NERVも国連軍艦の組織である。とはいえ対外的組織に過ぎずNERVは国連の軍団には異なり、機密も多いため、国連関係者とは異なるのである。

●簡易年表 セカンドインパクト後の世界

年月日	出来事
9月15日	インド、パキスタン間で難民同士の衝突が発生。さらに国連軍に吸収される。世界的な緊張状態が顕著に目撃される。
9月20日	テロリストが東京に新型爆弾を投下。
2月14日	パレンティン休戦臨時条約。
A.O.2102 2月14日	アメリカ、イギリス、ドイツ、ロシア、日本による国連軍再編制。
	国連本部、日本の松本に移管。
	セカンドインパクトの真相究明のため、再編に第一号国連調査団を派遣。
	第二次調査団を派遣。国連調査団委員会「セカンドインパクト調査委員会」による公的発表。
	セカンドインパクトの原因は隕石衝突によるもので、光速の数十%の速度で南極に落下したためとされる。

特記事項

セカンドインパクト後の南極

隕石の落下によって南極大陸は失われ、氷も溶解してしまっただけで、2015年の南極海は一面の有毒へと姿を変えている。だが海の生態はすべてなくとも希少な、通常の海洋生物を育てている。さらに海上のあらゆる道でできた巨大な柱が突き出し、この世のものとも思えない光景を作り出している。しかしこの景色を眺めた綾ガンドは「層層のなみで汚れた世界だ」と評したとされている。



セカンドインパクト後の南極は、鳥や魚はおろか、微生物すら生存しない死の世界と化す。このことと南極落下の因果関係は明らかではない。

A.D. 2015

●第3新東京市

02

ミサト、シンジの変化に書か

すばらなミサトの姿に呆れ返るシンジだが……

朝っぱらからだしなない嗜好でビールを飲むミサトにシンジはうんざりしていた。「ほんとに今日、学校へ来るんですか? 嫌々ながらミサトに尋ねるシンジ。今日は彼の道路相談の日なのだ。ミサトは彼の保護者として行く気満々のようである。やがてトウジたちがシンジを迎えにやってくる。「ミサトさん、その格好で出ていかないでよ。恥ずかしいから!」そう釘を刺して、シンジは玄関へ向かったのだ。



髪はぼろぼろで顔も洗っていないというルーサー風なミサト。食卓に置いてある彼女は道路相談に行くのも仕事のうちとおどけてみせる。しかし、「仕事ですのよ」悪気消滅したように、意うシンジに、失言だったと気づいた。



「皮肉な、まぐぐぐ打撃全無が指すまきたのよ!」地味なシンジを呆れ返らせるミサト。



トウジたちと、隣に同校するシンジは、すまじく打撃全無の姿を見せるようになっていた。

A.D. 2015

●高々度軌道

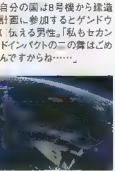
05

ゲンドウ、予算委員会に出席

そのころ、ゲンドウは予算委員会に出席するため、SSTOで南極上空を移動していた。隣に座った男が語りかけてくる。「サンプル回収の修正予算、あっさり通りかたね。「委員会も自分が生き残ることを最優先に考えている。そのための金は残すまい!」彼の言葉が必ずしも8号機の予算も承認され、さらに8号機の建造計画も進みつつある。「我々の道は彼らを倒すしかあるまい!」そうゲンドウは言い放った。



SSTOの下にはセカンドインパクトで変化した地層構造が広がっていた。かつて大陸が位置した場所は赤紫色に変色している。



EVAの正体を気にするシンジ、初号機にハーマニクス試験に参加

A.D. 2015

●NERV本部

06

シンジ、セカンドインパクトの真相を聞かされる

シンジはリツコからセカンドインパクトの真相について聞かされることになった。15年前、人類は最初の使徒を南極で発見した。その調査中に起きた原因不明の大爆発がセカンドインパクトであり、NERVとEVAは使徒の再出現によってサードインパクトが起こるのを未然に防ぐために存在するのだという。話し終えたリツコは背後のミサトを振り返り、「ところでアッ、予定通り、明日やるそうよ」と述べた。



最後にリツコから投げられた言葉は、「わかったわ」と動かし返答するミサト。その顔からは、いつもの陽気さが滲み出ていた。



ゲンドウ、予算委員会に出席

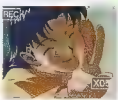
A.D. 2015

●第高中学校

03

ミサト、シンジの道路相談に出席

道路相談にミサトは真紅のフェラーリで到着。派手派手しい登場にトウジをはじめとする男子は嬉しそうに騒ぐが、シンジだけはしらけ気味である。するとトウジとケンクスはそんなシンジの背中を叩き、地球の平和はお前に任せるからミサトさんは自分たちになんて任せると言うのだった。



Vサインを向けるミサトの姿に、盛り上がりたトウジたち。

雨木ヒカリもはじめてする女生徒は、はしゃぎ男子に「バカみたい」と呆れ顔を見せる。

A.D. 2015

●第3新東京市

07

ミサト、旧東京地区に向

翌朝、いつものように食卓に着いていたシンジの前に、礼服を身に着けたミサトが現れた。「おはよう!」いつもと違い、きりりと引き締まった表情のミサトにシンジはたじろぐ。「仕事で旧東京まで行くからね。多分、帰りは遅いから、なんかデパで、淡々と用件を告げ、ミサトは出かけていった。普段のだらしない姿とあまりのギャップに、シンジは唖然としたまま、それでもしっかりとミサトを見送るのだった。



呉気によられたシンジがトウジを助けていた手を慰めず止めしめる。その場でペンペンも目を丸くしていた。



シンジ、リツコからセカンドインパクトの真相を聞かされる

ミサト、旧東京地区へ出向

A.D.2015

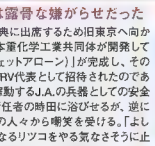
08

ミサトとリツコ、J.A.完成披露記念会に出席

ふたりを待っていたのは露骨な嫌がらせだった。ミサトはリツコと共にある式典に出席するため旧東京へ向かった。民間事業団体である日本重化学工業共同体が関係していた後援企業用兵器「J.A.（ジェットアロー）」が完成し、その披露記念会と試運転の場にNERV代表として招待されたのである。リツコは内蔵型推進力で稼働するJ.A.の兵器としての安全性をはじめとする質問を開発責任者の時田に浴びせるが、逆にEVAの暴走を質問され、場内の人々から嘲笑を受ける。「よしなさいよ、大人気ない。ムキになるリツコをやる気なさそうに止めるミサト。だが、彼女も内心では怒りに震え騒り返っていた。



大勢の招待客のなかで、あつたさに海をつづけていたNERV一行。リツコは次々に技術的な疑問を時田にぶつけていく。



機密の資料をかざし、時田は、だれもが「TOP SECRET」の壁にぶつかるとして、リツコを口封じしようとしていた。



時田はリツコに近づいていく。リツコは口封じしようとしていた。

09

J.A.の起動実験、開始

式典終了後、招待客は管制室のあるトーチカへ移った。いよいよJ.A.の公開試運転の開始である。巨大な格納庫が開くとJ.A.が姿を現した。「歩行、前進微速。右脚、前へ」。スタッフの声と共にゆっくりと一歩を踏み出す。だが暴走が起こったのは、まさにその時だった。



J.A.の管制室はトーチカ状の建造物のなかにあった。

命令を受け格納庫から足踏み出すJ.A.。足跡は見事成功かと思われたが……。

A.D.2015

12

ミサト、J.A.侵入準備を進める

独断で行動することに決めたミサトは初号機をこちらによこすようにNERV本部に連絡を取ると防護服に着替えるはじめた。J.A.に直接乗り込んで、人力で停止させようというのだ。彼女の決意を見て取った時田は、プログラム消去のパスワードは「希望」だと教えてくれた。



ミサトは初号機とリンクを送るように目向し伝える。



命がけでJ.A.に乗り込もうとするミサトに、時田もあきらみかけた。

13

ミサト、J.A.内部に侵入

決死の作戦に、シンジはミサトの一面を見た。

J.A.は廃墟となった旧東京の街を歩き続けた。炉心内部では着実に圧力が増しており、炉心融解のタイムリミットまでまだ時間が無い状態である。その時、輸送機で運ばれた初号機がJ.A.の背後から接近すると、相手の動きを封じ込めた。前進する



「真ん中ですか？ ミサトさんか？ シンジはアツの姿を覚えていた。



J.A.をシンジがカブつて押しどめている間に、ミサトはEVAの掌からJ.A.に乗り移る。無事にハッチを開いたミサトは、Vサインをシンジに出すとJ.A.の内部へと滑り込んでいった。

J.A.は5分以内に炉心融解する危険性が高い。輸送機から投下されたEVAはJ.A.にスピードで接近した。



危険な状況にさらされたミサトは、足跡を消すようにして、炉心へとVサインを出していった。

タクティクスシート

actics Sheet

第9使徒マトリエル戦

Sheet

13

THE NINTH ANGE. MATRIEL ANNIHILATION BATTLE

Illustration by Tak,yas o

基地機能を喪失した第3新東京市で、NERVは如何に闘ったか

TACTICS SHEET

第3新東京市は特殊な都市である。この都市は表向きには、セカンドインパクトとその後の争乱により壊滅した旧東京の行政機能を2001～2003年より暫定的に引き継いだ第2新東京市（旧長野県松本市）の首都機能を移すために、2005年にスタートした「第二次「選都」計画」によって建設された。しかし、2010年に都市が完成した後も、首都機能は移行されず、さらには一般住民の受け入れも制限されるなど、選都計画自体が都市を建設するための隠れ裏であった可能性が高い。

第3新東京市の構造は、表層部に建設された都市と、NERV本部の置かれたジオフロントと呼ばれる地下空洞部に二分される。さらに、都市部の各所にはエヴァンゲリオンを運用するためのサポートシステムが設置され、都市の行政もNERVの干渉下にある。つまり、第3新東京市とは、使徒の迎撃とセントラルドグマの維持の為に建設された「要塞」なのである。しかし、後にマトリエルと呼ばれる第9使徒の襲撃と前後して起こった電力の供給事故によって、思わぬ脆弱性を露呈する結果となった。

本来、ジオフロントは「コロニー」として機能するように建造されている。そのため、電力をはじめとするライフラインは、「正、副、予備」の三系統が用意され、どれかひとつがダウンしても残りがバックアップを行なえるように設計されている。そのため、第3新東京市、またはジオフロントが完全に機能を停止するという事は、理論上ありえないのである。しかし、第9使徒出現時の第3新東京市は、完全にその機能を喪失していた。すべての機器が使用できなかったため、使徒の出現と接近すら察知できなかったのである。沈黙する第3新東京市に対し、戦略自衛隊は情報の伝達以上のサポートを行わず、第2新東京市も積極的な行動を起こさなかった。こうした状況の中、使徒の接近を知ったNERVは、人力でエヴァンゲリオンを起動させ、使徒を迎撃したのである。

今回の事件において、注目すべきは対使徒戦ではなく、ジオフロントの構造的な欠点と、NERVと日本国政府の関係。停電が人為的に起こされたものであり、復旧ルートからNERV本部の構造を把握しようとした——であるといえよう。

RELATED MATTERS

- 第9使徒マトリエル
- EVA人力起動
- 第3新東京市
- NERV
- 日本国政府



クモに似た外観を持つ9番目の使徒。強力な溶解液を分泌するが、攻撃力は高くなかったと推測される。



第3新東京市の全機能が停電という、最悪の状況に陥る使徒の襲撃。情報の伝達・支援・攻撃のためのエヴァンゲリオンを運用する困難な状況下において、NERVの各員は必死の覚悟を以てこれに奮闘した。

非常事態における各員の行動

TACTICS SHEET

1 第3新東京市の停電

表層市街部、ジオフロント内の電力の供給が一斉に遮断される。一般電部だけでなく信号などの都市機能もマテ、ジオフロント内のワイヤラインも完全にその機能を停止した。残った電力はMAGIシステムとセントラルドグマの維持に使用された。



突然の停電はEVAのFVAD部へ大混乱を引き起こした。さらに、NERV本部は武器との連絡手段も失った。

2 テロの可能性示唆

電源システムは正、副、予備の3系統を持つため、数分以内に復旧されるはずであった。しかし、7分が経過しても状況は好転しなかった。二系統がローの余裕もないほど短い時間に落ちたという事実は、テロなどの破壊工作が原因と推測された。



本月初旬には、こうした状況下での使徒出現は、危機的状況を引き起こすことになった。

3 新たな使徒の確認

戦略自衛隊の系図帳が、太平洋上に新たな使徒を確認。熱帯方面からの上陸・侵攻が予想された。府中総括部隊司令部は風聞とおり警備隊に移行するか、これまでの経験から、部隊を出撃させるなどの積極的な行動を起こさなかった。



方面司令部は、使徒の接近をFVAD部に通知した。このため、NERV本部の復旧に取り組み始めた。

4 戦略自衛隊の連絡作戦

府中総括部隊司令部は使徒の出現をNERV本部に通知するために、小型飛行機を発進させた。小型機は第3新東京市の上空に到着すると、音声による直接連絡を試みた。その試みは成功し、ジオフロントに向かっていったNERVスタッフの耳に届いた。



緊急会議は、使徒への対応を方面司令部に任じた。使徒は第3新東京市へと接近しつつあった。

5 日向二尉、NERV本部に使徒接近を通知

小型機からの連絡によって使徒の接近を知ったNERVの日向二尉は、独自の判断で付近を通りかかった選挙活動中の一般車両を捉え、さらに車両内の乗込人口から、閉鎖されているルートを経由、発令所に到着すると、使徒の出現を報告した。



発令所では、今回の事件が本部構造の弱点を露呈したものであると、現場スタッフからの報告を聞き取り、防禦策を講じた。

6 NERV本部、報告を受けEVA出撃を発令

日向二尉の報告を受けた総司令は、EVAの出撃を指示。自身もケイジへと向かった。3機のEVAの出撃準備は人力で行なわれ、起動に必要な電力は非常用のディーゼル発電機で確保された。しかし、その時点でEVAの操縦者は到着していなかった。



総司令は発令所を各別担当に任じた。ケイジはNERV本部に到着した。NERV本部に向かった。

7 EVA出撃、使徒と接触

独自にケイジに到達した3人の操縦者は、EVAに搭乗。それを確認した総司令はEVAを出撃させた。出撃した3機のEVAは、起動用と思われる通路から地上を日指した。その後、地上に繋がる縦穴に出るが、そこで使徒の攻撃を受け機体は余剰なくされた。



使徒は強力な溶解液を分泌した。溶解液は機体各部に付着し、EVAの機体は残り3分の2を残されてしまった。

8 3機連動の作戦を立案、使徒を撃破

EVA 1号機の操縦者が、新たな作戦を立案。各機がフレイトリフトを利用し、初号機がそれを使用して使徒を攻撃、2号機はA.T.フィールドの中和と初号機を溶解液から守るアシストを行なった。3機のEVAの連動によって、使徒は撃破された。

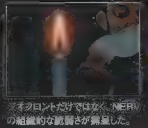


3機のEVAによる連携攻撃によって使徒は撃破された。復旧作業と同時に、電力の供給が再開した。

作戦報告

NERV職員的能力と、組織的欠点

今回の戦闘では、NERV職員は非常事態への対応能力が疑われることとなった。職員は独自の判断で職務を遂行し、NERVの人的能力の高さと施設設計の確かなるを窺った。しかし、組織としてONERVは、非常事態への対応能力(訓練、非常装備調達、マニュアル等)が充分ではなかったようである。



ジオフロントだけでなく、NERVの組織的な訓練が不足していた。



こうした状況下では、第3新東京市の選挙準備も失われかねた。

●非常時におけるEVAの運用

EVAの電源の整備は通常整備の一環として行なわれており、起動用の電源も確保されていた。しかし、プラグの挿入や挿入用の線材がなかった。そのため今後は非常事態を想定した線材の設置が望まれる。

使徒ならぬ人々の手で引き起こされた第3新東京市の機能停止。そして第9使徒の襲来。最悪のタイミングで行なわれたテロに、NERVスタッフは被害を蒙ったのである。

技術調査

第2次稼働延長試験

停電事件の当日、EVA 1号機の稼働延長試験が行なわれていた。これは第5使徒マトリエルとの戦闘で中破した番号機を、再稼働させるためのものと推測される。

一機体に大ダメージを受けた車両は、改修にあたり機体色や一部パーツなどが変更される。



実験機が稼働し始めるも、機が故障のために、実験は中断している。



特記事項

第9使徒マトリエル

第9使徒は、EVAの融合装甲をも溶かす強力な溶解液を分泌する。しかし、その形骸、撃破時の機子などから、格闘能力、防御能力などの直接的な戦闘力は低かったと推測される。



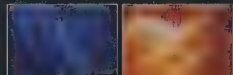
本機下部の「目」のような眼窩から溶解液を分泌。それ以外の攻撃法は確認されていない。



追加報告

コロニーとしてのジオフロント

第3新東京市の地下に位置するジオフロントは、完全に独立したコロニーとして機能することを前提に建造されている。そのため、ライフラインなどの整備も万全である。



広大な地下空間を有するジオフロント。NERV本部の傍には巨大な自然洞窟なども存在する。



非常時には、地上都市のビル群が収納される。地上との往來にはリニアールなども使用される。

E

エクストラシート
xtra Sheet

最終安全装置

アンビカル・ブリッジに備わるEVAを固定するための最後の拘束具。肩部から二の腕にかけてを固定しており、リフトオフ時に解除される。

最終安全装置

EVA専用改造電子錠（ボジトロンスナイパーライフル）の最終安全装置。電力の第3次接続後、葛城ミサトの指示により解除される。



最終安全装置が解除されたあと、日向マコトの指示で撃鉄が起こされ、ヒューズが破壊される。

最終安全装置

ターミナルドグマにあるL.C.I.プラントへの扉（もしくはそのロックシステム）のこと。その裏にはアダムとされる存在が幽閉されている。なお、日向マコトは扉を「Heaven's Door」と称している。

最初の人間

加持リョウジによって、ドイツ支部からNERV本部に運送されたアダムとされる胎児を称して言われた言葉。セカンドインパクトの原因となった巨人アダムの肉体と何らかの関係があるものと推測される。



人類最大の災厄とされるセカンドインパクトは、この「最初の人間」と称されたアダムとの接触で引き起こされたという。

サキエル

セカンドインパクトから15年を経て出現した、第3使徒。人型に近い形状で、直立歩行により移動する。首はないものの、鳥類を思わせる顔のようなものを胸部上方に持つ。掌

部より光の槍のようなものを斜出して攻撃し、機能増強後は眼塞より煌光線を放つようになる。水没した旧市街より上陸し、第3新東京市へと侵攻した。その途中が地雷を使用した国連軍による猛攻撃を受けるも、A.T.フィールドの展開により目立ったダメージはなし。小破した顔面部等も、自己修復機能により回復した。EVA初号機との戦闘（第一次直上会戦）において、初号機の左腕部と顔部に大きな損害を与え沈黙させるが、暴走した初号機によりコアを攻撃され、同機を巻き込み自爆した。なお、サキエルはユダヤ神話における天使の名。木曜日の守護聖人であり、「水」を司る天使とされる。ユダヤ教のグループのひとつだったエッセネ派においては「大天使」のひとつに数えられ、悪魔学の本書においては、9つの天球層を支配する9人の天使のうちの一つとされ、こちらでも木星を支配する天使だとされている。



15年ぶりに現れた使徒。その圧倒的な攻撃力と防衛力は国連軍を驚愕させた。

作業員

NERVにおいてEVAの整備を担当する作業員。また、使徒の調査の際に駆り出されることもあるようである。NERVの文字が刻まれたタグのついた、オレンジ色の作業服に身を包んでいる。



理想的なサンプルとして残された第4使徒シャムシエルの残骸を調査する際は、多数の作業員が駆り出されている。

作戦課第二分析室

ヤシマ作戦が立案された場所。作戦の発令前、葛城ミサトと日向マコトは、ここで実物大のEVA初号機のバルーン・ダミーや独12式自走臼砲等を使った実験結果等も鑑みつつ、第5使徒ラミエルの攻撃パターンを分析、対抗策を考案した。



室内には多数のモニターがあり、それをオペレーターが操作している。分析のためのテクノロジの粋が凝集した部屋といえる。

作戦部第一課

NERV本部の部署のひとつで、正式には戦術作戦部作戦局第一課。葛城ミサトと日向マコトが所属している。対使徒戦における作戦の立案、指揮等を担当する部署。

サターン

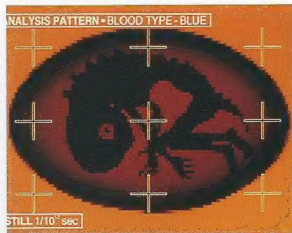
鈴蘭トウジや洞木ヒカリが所有している機種のゲーム機。発売は1994年で、西暦2015年の時点においてレトロゲームに分類されるものであったらうと推測される。ヤシマ作戦における大電力供給のため、日本全国が停電するとの臨時ニュースが流された際に、トウジと相田ケンスケは鈴蘭部屋にてサターンでゲームをしていた。



エヴァンゲリオン操縦者格としての自信を失った惣流・アスカ・ラングレーは、ヒカリの家に入り寄り添い、現実逃避するのことがよく彼願していた。

蛹

完全変態をする昆蟲が、幼虫期と成虫期との間に経過する发育段階。浅間山口内で発見された成体期の第8使徒サナルパフォンを指して、赤木リツコは「蛹の状態でいたな」と説明した。



蛹のような状態であったサナルパフォンは抵抗することがなく、容易に電磁圏に拘束することができた。

サハキエル

インド洋上空の衛星軌道上に出現した第10使徒。巨大な目のごとき中心部の左右から、アメイバのような手が生えた形状を持つ。A.T.フィールドを拡大、加層することによりサーチ衛星を破壊し、自身の一部を分離させて個体を生み、それを高々度から落下させる質量攻撃を行なう。A.T.フィールドを武器として活用した初の使徒。また、強力なジャミング能力を持ち、地上での通信妨害も行なっていた。質量攻撃の落下誤差を修正したのち、本体ごとNERV本部に向かって落下を開始。本部を横こぎ破壊しようとしたものの、EVA初号機のA.T.フィールドにより崖地寸前に受け止められ、銃号機のプログレッシブ・ナイフによりコアを破壊されて滅滅された。なお、サハキエルはユダヤ、キリスト教神祇主義の伝承等では、「空」を司る天使とされる。

E

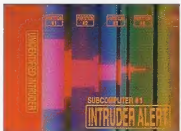
エクストラシート
Extra Sheet



突如、衛星軌道上に現れたエキセントリックな姿の使徒に対し、葛城ミサトは「常識を疑う」とコメントしていた。

サブコンピュータ

MAGIの下部に位置すると思われるNERV本部のコンピュータ。ブリブボックスの機体体を経由して第11使徒にウイルスからハッキングを受けた。その際、モニター上に「SUB-COMPUTER #1」とあるため、複数存在すると思われる。



使徒の進化を確認した直後にハッキングを受ける。防壁を次々と突破され、結果的に使徒の手に落ちしてしまう。

サルベージ

救助、救出のこと。EVA初号機に取り込まれた碇シンジを救出するべく赤木リツコが発案した計画は、「EP2式サルベージ作業手順要綱（含、LP3式補完手順）」と称された。これは原稿の海水、生命のスープへと変化したL.C.L.内に、自我境界線を失った状態で浮かび碇シンジの身体を再構成し、そこに精神を定着させるという作業を行なうというもの。なお、2004年にも同様の計画が実行されたが失敗に終わっている。そのときのサルベージ対象はシンジの母、碇ユイであったようだ。シンジのサルベージ計画書は、2004年に実行された計画のデータをもとに作成されている。しかし、シンジのサルベージ計画も失敗に終わり、救出されたエントラブラックからはL.C.L.がプラグスーツと共に流れ出した。最終的にはシンジは生還するが、これはサルベージの結果ではなく、シンジ自身の意思によるものだったと推測される。なお、第12使徒レリエルの形成したティラックの海に取り込まれた初号機を救出する作戦は「強制サルベージ」と称されていた。



シンジが現実世界へと帰ることを選んでいたため、サルベージ計画は失敗に終わることになった。

三佐

NERVの階級。第3部隊において、葛城ミサトが一刷から昇格した。NERVでは自衛隊の階級制度を踏襲しているように、一般の軍隊でいう少佐に相当する。



碇元の階級を目撃し見つけた相田ゲンスケは、ミサトが副官から佐官へ昇進したことを知る。

サンダルフォン

浅間山火口内で発見された第8使徒。深度1,780mのマグマ中に確認されたときは、成長きっていない蛹のような状態であった。NERVはこの使徒の捕獲を目指し、A-17を発令。D型装備のEVA試写機により、電磁光波砲から内拘束する捕獲作戦を展開した。捕獲に成功したものの使徒は直後に弱体化を始めて電磁砲から脱出、急速な成長のちに試写機を襲撃した。しかし、口内に冷却液を注入することにより、熱膨張状態にあった体組織が破損。そこにプラグレシブ・ナイフを突き刺され、マグマ内に沈没する。発見時、無人観測艇によってモニターされたその形状は人間の胎児の姿に酷似しており、それぞれ2本ずつの手足、5本の手の指を持つことが確認された。しかし、弱体化成長した姿はカンブリア紀の生物アノマロカリスのような口と、カレイのような飛び出した目とヒレを持つ魚類に近い姿へと変貌した。その能力は生物の概念を超えたもので、マグマ内を自由に高速移動すると、口を開くことも可能だった。なお、サンダルフォンはユダヤ、キリスト教における天使の名。その名はギリシア語で「共通の兄弟」を意味し、また、「胎児」の最下位とされる。カバラにおいては、セファロートの根の第8位に位置するマルクトを支配する大天使で、最頂部ケルを支配するメタトロンとは双子であるという。エノク書によると、第5天マティを支配する天使で、天に進するほどの巨大な姿をしているとされ、罪人犯した天使たちが閉鎖される牢獄の支配者でもあったと言われる。



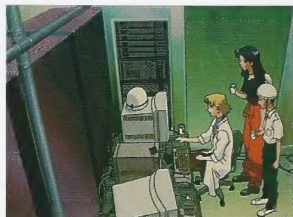
予測していたよりはるかに早く弱体化を始めてしまったため、初めて使徒を拘束するという作戦は失敗に終わった。

3バカトリオ

碇シンジ、鈴屋トウジ、相田ゲンスケの3人を指す。彼らと同じ2年A組の女子が3人を導論する際の通称。主に洞木ヒカリや惣流・アスカ・ラングレーが使う。

サンプル

第4使徒シャムシエルの残骸を指して赤木リツコが言った言葉。コア以外はほぼ原型を留めていたため、使徒を研究するサンプルとしては理想的な状態だったようだ。



サンプルを分析することにより、使徒を構成する物質や、その固有波形パターンが人間の遺伝子と酷似していることが明らかになった。

303病室

使徒による精神攻撃を受けた上に自信を失くし、心神喪失状態となったセカンドシルドレン、惣流・アスカ・ラングレーが収容されていた病室。NERV本部内の第一脳神経外科にある一室のようだ。するが着がなくなっていた碇シンジは、この部屋でアスカに助けを求めようとする。



周囲の人間を怖がり、葛城ミサトからも検閲依頼も受け出さずとしたシンジが訪れたのは、アスカが収容されている303病室だった。

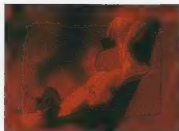
CATEGORY



Glossary

CTモニター

「Computed Tomography」（コンピュータ断層撮影）により、放射線を用いて断面した物体をコンピュータ処理で画像化した映像を映すモニターの表示方式。視界が悪く物体が見づらい場合でも、コンピュータの画像処理でモニターに表示してくれる。浅間山火口に潜入したとき、視界の悪さを見て惣流・アスカ・ラングレーがEVA試写機のモニターをこの方式に切り替えた。



視界がゼロに等しい火口内において、アスカは外部映像方式をCTモニターへと切り替えた。

E

エクストラシート
xtra Sheet

また、天蓋部中央には非常時に第3新東京市上に建つ重要ビルを収納するための、9つの収納ブロックが設けられている。この天蓋部は、ゼーレがNERVの直接占拠を画策した際に、戦略自衛隊のm²兵器による爆撃のためにほぼ全壊した。なお、一般的にジオフロントとは、土地所有者の所有権が及ばない大深度地下空間(地下50m以深)を利用した居住空間、もしくは新物流基地、廃棄物処理場等を指す。



ジオフロントの景色を初めて見た瞬間、シンジは感動を覚えた。

死海文書

「死海写本」と呼称される一連の書物。ゼーレが活動の指針としていた預言書的な『真死海文書』とは別のものを指す。1947年、イスラエルの死海北西岸の要塞都市クラン近くの11箇所の洞窟で、アラブ系の遊牧民の少年によって偶然発見され、それ以後も1956年頃まで次々と洞窟内から発見された。文書を記す言語には、ヘブライ語のほかにはわずかながらアラム語、ギリシア語も使用されている。成立年代は紀元前2世紀中頃から紀元後1世紀の間と推定されている。発見された文書は少なくとも800点存在し、その約30%はヘブライ語による旧約聖書原本の写本で、「エッセネ記」以外の全文が残っている。それ以外の内訳は、約30%が聖書の注釈・内容文書、約25%がヘブライ語の聖書正典には含まれない外典・偽典の類、約15%が未判明のものとなっている。筆跡分析の結果、数百人の異なる筆跡で書かれており、また、その流麗な筆跡から当時の職業的筆記者の手によるものと判明。そのため、これらの写本はエルサレム神殿図書館から流出したものと考えられている。真死海文書も参照。

の殿堂「AEL」人工進化研究所
死海写本の秘密

碇シンジの内面世界で見られる記事の中にも、人工進化研究所と共に死海写本の名が見られる。

自我境界線

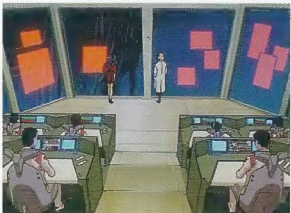
自我と外界との境界線のこと。自分の肉体を自我が「自己」と認めるための線であり、これを失うと肉体は量子状態に拡散すると推測される。碇シンジがEVA初号機に取り込まれた際のサルベージ計画は、この自我境界線を失ったために量子状態になってエントリープラグ内を漂っていたシンジの肉体を再構成し、精神を定着させるといったものだった。



自我境界線を失った人間が肉体を失うのと同様なら、A.T.フィールドもまた自我境界線といえるのかもしれない。

シグマユニット

セントラルドグマ内の施設。オートパイロット実験を行っていたプリノーボックスに隣接する。この施設第872タンク壁より第11使徒イロウが侵入した際に汚染された。なお、「シグマユニット」とは遺伝子工学における用語で、DNAからRNAへの転写を行なう役割を持つRNAポリメラーゼを構成する5つのポリペプチド・サブユニットのひとつを σ (シグマ)ユニット (もしくは σ サブユニット)と呼ぶ。



使用による疲労が発生した際、セントラルドグマを物理的に隔離することによりシグマユニットは隔離された。

思考言語

エヴァンゲリオン操縦資格者が、EVAへの操縦時、思考に用いる言語。頭の後部ガエル迎撃艇において、EVA試運転の思考言語は独逸・アスカ・ラングレーの日常言語であるドイツ語に設定されていたのだが、同乗していた碇シンジが日本語による思考をしていたせいで思考ノイズが発生。そのため、アスカは思考言語を日本語に変更している。思考ノイズも参照。



思考言語の異質による思考ノイズが発生すると、プラグ内のモニターいっぱいエラー文字が表示される。

思考ノイズ

エントリープラグ内に想定外の事柄が挿入されることにより、エヴァンゲリオン操縦資格者とEVAの神経接続が乱れた状態になること。操縦資格者ではない人間の関与や、設

定された思考言語以外の言語での思考等により発生する。思考言語も参照。



エントリープラグ内に異物が挿入されることにより、神経バズにノイズが発生する。

自己診断モード

MAGIシステムが自律的に行なう作業モードのひとつ。第127次定期検診後、メルキオール、バルタザール、カスバの3基すべてが自動的に自己診断モードに移行した。

自走陽電子砲

戦略自衛隊技術研究所が開発していた兵器。NERVはヤマト作戦においてこれを徴収し、大出力ボルトロスナイパーライフルへと改造した。



EVA専用陽電子砲ではA.T.フィールドを貫通するだけの大出力に削ることができなかったため、戦車自より自走陽電子砲が徴収されることとなった。

師団長

師団は軍隊の部隊単位のひとつ。独立した作戦行動を取ることが可能な、最大の固定編制部隊とされる。戦略自衛隊の師団長は、ゼーレがNERV本部の直接占拠を指示した際にNERV戦略作戦の指揮を執っていた。



「作戦は、失敗だった」と悟ったかのように臨んだ師団長(左)は、その後セードインパクトの衝撃波に呑み込まれる。